

聞き書きプロジェクト（平成26年度実施概要）

1. 全体の流れ

ステップ1：東条川疏水、聞き書きについて学ぶ（研修）

ステップ2：聞き書き計画を作成する（事前研修）

8月11日（月）13～17時

場 所：アクア東条 研修室（加東市）

聞き手：3名（鈴木朝道（神戸大）、山川友貴（兵庫教育大）、坂本夏奈（兵庫教育大））

語り手：1名（元県東播土地改良区事務局長 廣畑宗治）

事務局：加東市（大畑課長）、県民局加古川流域土地改良事務所（柏崎参事、山際専門員）

県釣針協同組合（藤井参事）

（株）地域計画建築研究所（アルパック）森野

- ・ 東条川疏水について、聞き書きをする際の注意点などについて講義形式で学びます。
- ・ 実際に、お話をお聞きします（対話の部分を体験と同時に東条川疏水について知る）。
- ・ 語り手のプロフィール、東条川疏水に関する参考資料などをもとに、どんなことをお聞きするか質問を準備します。
- ・ 語り手1人の方に、聞き手は複数名でグループとなり、お話をお聞きします。そのため、当日の役割分担やチームの目標（心がけること）などを決めます。



ステップ3：聞き書きを行う。対話。（半日～終日）

- ・語り手さん1名につき、2時間程度お話をお聞きしました。
- ・聞き手の方が文書を書き起こすのは1人の方のお話です。そのほか、聞き手補佐や写真係として参加します。



語り手：土肥 芳郎氏（加東市）

内容：：地場産業である釣針の生産量の変遷・地域との連携の状況

イベント等活動内容・釣針とミュージカルの結合



語り手：藤原 善巳氏（小野市）

内容：焼山開拓の入植の歴史・東条川疏水新設時のエピソード・最近の配水調整の課題



語り手：堀内 和男氏（加東市）

内容：戦前期における教員育成機関の状況・戦時のエピソード・戦後の学校教育

歴史民族研究会の活動・文化財保護会の内容・観光ボランティアの活動

ステップ4：聞き書きを行う。書き起こす。(2～3日)

- ・ 録音テープを書き起こし、作品としてまとめる。書き起こした作品は、事務局で確認し、修正し、語り手の方にも確認いただき、完成させていきます。(H26年度の作品は進行中)
- ・ 聞き書きプロジェクトに参加してみたの感想をまとめる。

【聞き書きに参加後、作品にまとめていく】

聞き書き作品 2014

東条川と釣り針 ～土肥 芳郎さんに聞く～

●語り手 土肥 芳郎(株)土肥富 代表取締役

●聞き手 鈴木 朝道(神戸大学農学部)



1. この地域を見てきて

すごく変わったと思いますねこの地域は。わたしは昭和12年生まれですから終戦をむかえたのは小学二年生の夏でした。窮乏の時代というのか非常に貧しい時代でしたね。わたしは先々代のおじいさんから大きく目玉をくらったことがあります。昔は煮干しを味噌汁に入れてたんです。田舎ではね。それでね煮干しだけのけて食べなかったんです。そうしたらおじいさんからえらい怒られてね、そこから食べるようになってね。好き嫌いもなくなりました。だからね当時は煮干し一匹でも非常に大切なものだったという時代でしたね。

あとは大家族というのが多かったですね。今は核家族ですよ。それからね今でも何軒が残ってますけどね藁屋根の大きな屋根をもった家が多かったですね。

それから牛とか馬を飼育してねそれを農用に使ったりしておりました。木を出すのに馬を使ったりもしてました。牛とか馬は納屋に飼って家族同様に扱ってましたね。そしてねこの川につれてきて体を洗ってやるんですよ。あと鶏ですね。鶏はまさに庭に放し飼いでした。そういうのが散見されました。それからこの周囲はほとんど農家でありますので、当時はほとんどいってもいいくらい自分のところの分だけ苗を育成されてましたね。わたしも時々手伝いをしたことがあるんですけどね足にねヒルがくつつくんですよ。吸いついて痛

くてかゆくて非常にこまったことがありますね。

あとははね当時は農薬がなかったですね。除草をどういう風にしてたかということですけど、当時は手押し車というのがあってね、イネとイネの間を押して行くんですよ。ということはね何を意味しているかということ、植えるときにね間隔がジグザグしてると非常にやりにくいんですよ。ですから糸をピンとひっぱってね植えていったね。今は農薬は使われてますね。ヘリコプターなども使ってますね。

それから戦中ですのでどんどん物が不足していききました」。戦時優先でしたのでなんでもかんでも戦争に使おうと。それはもう原材料の段階でも制限されてくるんですけど、最終的にはね18年くらいになったらね、今ある物まで供出されてしまうんですよ。無料でだせというんですよ。だから銅でできてるお寺の鐘とか二宮金次郎の銅像までとられてしまう。そういう窮乏時代でしたね。

自家用車なんてほとんどみられなかったし、バスが通っておったんで唯一の公共交通機関でしたね。電車とか自動車ありませんね。自転車で用足ししておりました。

今みたいにテレビとかはなくラジオしかなかったので娯楽が少なかったですね。映画館といっても遠いところしかなかったです。そこで川向うの

野尻さんというかたが自分で映写機をもっておられてね無声映画を見してくれるんですよ。声がないからね自分で語られるんですよ、映写しながらね。子ども時代それが非常に楽しみでね。

あとは自然を使って遊んで駆けまわってましたね。池は危ないからね、すぐその川で遊んでましたね。これは僕の経験なんですけどね、先輩にぐっと顔を川に押し込められましてねそこで水の怖さも覚えましたね。これは疏水とも関係あるんですけど昭和 26 年に東条ダムが完成されてますけどそれまでにね、あそこでのど自慢大会があったんですよ。それを昔はロープウェイを使って見に行きましたね。それが今でも記憶に残っております。

2. 学生時代

中東条中学校といいまして、いまは統合して東条中学校になってるんですけどね、そこに通ってました。わたしはね本来は中東条中学校からは社高等学校しか行けなかったんですよ。奨学生という制度があってね。正直ね 10 番目以内に入っていないとだめだったんですよ。そういうな状態でね、お兄さんが小野高校に行ったもんですからわたしもね、ついていくかたちで三年間小野高等学校にいかしてもらいました。それから関西学院大学にね。それもね兄の後をそのまま行っただっていうね兄が露払いしてくれてるんです。みんな兄の後をすっすっすといっとるんですよ。

わたしはね会計学の青木林太郎という先生の門下生なんですけど、大学では本当は経営学をやりたかったですよ。経営学をおもに経営学と会計学の接点になるようなもの研究テーマにしてね修士論文を通してもうたんですよ。でもね大学院に残る会計というのは、ほとんどは税理士や公認会計士をめざしてる人が入るんです。わたしは経営者を目指してたんで、他の方たちとは変わってましたね。わたしはねとにかく二年間で戻らないとい

けないと考えてましたんでその大学院 2 年間は一生懸命勉強しました。グリークラブに打ち込んでた四年間の不足を補うという意気込みでね。

3. 社会人となって

それから土肥富太郎商店に入社しましてね、ほんとに自分がこうしようという考え方がないままにお父さんの経営するこの会社にはいったんですよ。

はたらく上で意識していたことはやっぱり新米の時代とある程度慣れてきたころとで変わってくるかもしれないですね。わたしは最初は率先垂範ということが必要だろうと。自分みずからがやろうとそして範を垂らすという姿勢で何事も取り組んでました。そして慣れてきて経営者の卵みたいな段階で、やっぱり己の欲せざるところを人に施すことなかれという言葉がありますよね。そういうことを心掛けて人生訓としていました。もうひとつ大事なことはずっと人との出会いを通じて、人皆師なりという言葉も必要であると。人をみんなお師匠さんだとおもって対応しなさいと。この三つはわたしの半生の人生訓であるかもしれないね。

平成 2 年に代表取締役になって同時に株式会社土肥富という風に変名を変更したんですよ。やっぱりね、リクルートするときにね株式会社〇〇商店とついたらダサイと言われるんですよ。それでこれなんとかせないかんでというのはコンサルタントの先生からお聞きしてね。ああそうやなどというのは自分でも思いまして、ただしわたしのところは輸出企業でありますので土肥富&カンパニーリミテッドという英文字はそのまま残したいなと思って株式会社土肥富だったらそのまま行けそうやなど。こういう睨みもありましたんでね。

そしてこの土肥富太郎商店というのはどこからきてますとといいますと、初代土肥富太郎というのがこの会社を創業してますので、土肥富太郎商店

ということで出発いたしました
途中で昭和の 26 年だったか株式会社に変えて頭に株式会社をつけて株式会社土肥富太郎商店になったんですね。

4. 人生の目標

いま私は代表取締役で会長と区別して呼んでおるんですけども、実はCEOというものをしております。生涯現役をめざしてわたしは頑張りたいと思ってますけども、100 歳までは生きたいと。生涯現役といいましてもこのCEOは 80 で後継者に委譲しようかなと。こういう風に思っております。それまでは、会社を美田として残せるように頑張ろうと。それからね組合活動も含めて、播州針の元祖小寺彦兵衛さんの顕彰と遺徳を多くの人に伝える。伝道役というのかな、私自体が彦兵衛に変装してやっています。

それからねわたしの今後の目標はこういうところにあるんですよ。川上におるものとしての責務として川下へ豊かな水を送れるように、ブナの植樹を継続してやろうと。いまね加古川のところに 50 本植えてね、キャンプ場のあとにやってるんですけど、今で 4 年目かな。しかしね途中でシカにやられましてね。シカがね若芽を切ってしまうんですよ。ここにもねシカが出るんですよ。だから今やっぱり山に餌がなくなってるから出てくるんだろうというのが本当のようです。それから森が貧弱になってるというのを意味してるだろうと思いますね。猿もでてくる猪もでてくる。里に出てきよるんですよ。それはね出てくるのが本能ではないと思うんよね。森の中に餌があればそれで何も危険な里に出てくる必要はないからね。やむを得なく出て来たやおもうんですよ。そういうことから森が貧弱であるというのは間違いないと。しかしねわたしが提唱しているブナの植樹というのはなんと気の長い話なんですよ。50 年 100 年 200 年の長いスパンで考えなければならないことやから。今やらないといけないと。間に合わない

んですよ。新たな土地の山林を使用させていただけるという話がまとまったもので、この事業を将来どうやったらどうかと組合の理事会にかけあったところ、一回山林を見学しましょうと話が進んでおります。環境を良くするというのは釣り針を売ることにもつながるんです。

5. 釣り針の魅力

釣り針というのは釣りには欠かせない道具ということですね。糸とか紐があつて願わくば餌があれば釣りができるんですよ。これが、昭和の時代から存在しているわけです。よく考えてみたらね、形なんかはほとんど変わってないんですよ、材質が変わってるだけなんですよ。それだけ保守的な品物なんですよ。しかしね釣り針の欠かせないといっても大企業がやっても成り立つような商売ではないんです。もともと中小企業が担当するような、そういう事業であるとわたしは思うんですよ。その理由はね、多種少量なんですよ。種類は多いんですけど量が少ないんです。オートメーション化しても採算が合わないんです。そういうわけでもともと中小企業というか零細企業の持ち場なんですよ。ましてやね、播州釣り針が発足したのは 162 年前なんですよ。そのときに小寺彦兵衛というかたがおられてね、その方が技術をもちかえられたという風に伝えられているんです。そのかたが 41 歳になってたんかな、そして 71 歳でお亡くなりになられたんかな。いずれにしてもねその人自身はほんの短い期間しか釣り針づくりができなかったんだけどね。でもその人が釣り針を作りかけてから、この周辺のね次男坊三男坊あたりがねおれもあたしもいうてね釣り針つくりを懇願したんですよ。そうして瞬く間に広まっていったんです。そこでとどまらないでね、弟子たちが一生懸命がんばってね。その当時はね一本一本手作りで作ってたんですよ。やすりとはさみとかんまで。それが明治の 40 年くらいまで続いてたんです。ところがねいろいろ重要が増えてきたんでこれでは

いけないということで、われわれの富太郎が40年遅れてね機械で一気に数十本できる機械を発明したんです。それで飛躍的に製造量が増えてね輸出が増えたときにもこなせるようになったんです。そしてね残念なことにね昭和16年やったかな太平洋戦争と進んでいくわけですけどね、そのときには先ほども話しましたが材料は戦時優先でね、どんどんどんどん向こうのほうに行っちゃってね釣り針のほうに回せないということになってくるんですよ。そこで組合をつくらないといかんと。組合をつくって材料をまわしてもらわんといけないと、そういう風な努力を業界が一丸となっていましたね。そしてようやく少しづつ回してもらって一番厳しいときでも少しはあったらしいです。非常に厳しい時代でもね完全に止めずにいけたと。それは何故かというね、遊び釣りじゃないんです。食料確保のために釣り針が使われるんだということのをうたい文句にしたわけです。そうすると幾分か国の方でもね理解を示してくれたんです。

戦後は、昭和22年くらいから自由に仕事ができるようになりましてね、うちは21年くらいから少しづつ輸出再開していったんです。当時占領状態になっていましたからアメリカの支援を得てね、釣り針もアメリカ市場へどんどん出たんです。次に昭和26年の朝鮮動乱のときに特需が出まして、それでまた釣り針の業界がぐーっと大きくなったんですね。そのころにはねオートメーション化が進んでました、それで量にも対応できるようになってました。規模が大きくなり製品もある程度安定していくという方向へ向かったんです。

話がそれましたが釣り針の魅力というのは、釣り具全体でもそうですがアイデアを添えられるとか取り入れることができる商品なんですね。アイデア1つでまた新しい商品ができるとそういう品物なんです。釣りをしてみてこういうものが便利やという、こういう発想がありますねそういうアイデアです。たとえばのはなしね、昔は狐と袖と伊勢山という三つの釣り針があればすべての

釣りができるという、そういう時代が長い間あったんです。しかし、戦後はねどんどん物が裕福になって40年代なってきたらね、品種が魚種ごとに釣り針が開発されるというそういう状態になってきてね。いまではね釣り方によっても違ってくるというね、そういうなねアイデアがどんどん持ち込めるという良さがありますね。そこにはね知的所有権というものが入ってくる余地があります。だから特許とか商標とかとってね、有利に商売を展開できるという面も持ってますので、面白味がありますね。それからまあ、世界的にみて競争は激しいといえば激しいですけど生産している国はそこまで多くないんです。10カ国ほどなんです。もちろん日本でも80社もあるとか業者の数は非常に多いんです。しかしねそんな中でね日本のおかれた立場ゆうのはねわたしは非常に恵まれていると思うんです。というのはね立地もいいんですけど、世界70億のうち30億がアジアに住んでおるんですねそういうことからいけば非常に有利な立場にありますね。立地という面ではね。それから技術水準が非常に高い。それからそういったもので作られた材料も非常に高級なものがねつくれる。それから設備も依頼すれば色々なものが開発してもらえる。こういうわけで工業水準というのが日本は非常に高いということを考えていったらね、わたしは日本でできる釣り針ゆうのは世界1のものというてもおかしくない。そうでなければならぬ。とわたしは思いますね。

【聞き書きプロジェクトに参加しての感想】

聞き書きを終えて

神戸大学農学部 鈴木朝道

聞き書きには、土肥芳朗さんのときは聞き手として、藤原善己さん堀内和男さんのときは、オブザーバーとして参加させていただきました。このようなお年寄りと接する機会は普段ほとんどなく不安もありましたが、楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

わたしは東条川疏水を卒業論文のテーマの対象として研究しています。ですから、この聞き書きプロジェクトへの参加も何か研究の材料になるものを探していたというのがきっかけでした。しかし参加して語り手さん方の話を聞いている内に、研究材料のようなものに収まるものではない、もっと大切な人生の経験を聞いている自分に気がつきました。「人の経験を知る」というのは非常にむしろ大事なことだと感じました。

わたしは、このようなお年寄りの経験は地域の資源でありこれから地域を担っていく次世代につないでいかなければならないものと考えます。この聞き書きを通して特に感じたのは、なにより「若い世代に話したい」という気持ちでした。まだまだ話し足りない伝えたいことがたくさんある、そんな様子でした。きっとどの地域でも自分の経験をこのようにお話ししたいお年寄りはたくさんいます。しかし核家族化が進み大家族が減っている現状を考えると、わたしたちの世代がお年寄りと接する機会はさらに減っていくと考えられます。

話したいお年寄りと知っておくべき若者とがいて、それらが接する機会がないというのは非常に残念なことです。今回参加し

た聞き書きプロジェクトのような、お年寄りと若者をつなぐイベントが継続的に行われ拡大し、より多くの人に参加するようになってほしいと思います。

最後になりましたが、貴重な時間を頂きました土肥さん藤原さん堀内さん、関係者の皆様ありがとうございました。

地域の人生を掘り起こす

聞き書きプロジェクトの聞き手参加者を募集しています。

詳細、お問い合わせは

【事務局】

加古川流域土地改良事務所 東条川疏水ネットワーク博物館

担当：山際（やまぎわ）まで

TEL：0794-70-7006 FAX：0794-83-6835

メール：takeshi_yamagiwa01pref.hyogo.lg.jp

東条川疏水
ネットワーク
博物館 

